

厚生労働行政推進調査事業費補助金 肝炎等克服緊急対策研究事業  
「肝炎ウイルス検査受検から受診、受療に至る肝炎対策の効果検証と拡充に関する研究」  
2019年度 分担研究報告書

「肝炎医療コーディネーターによる HCV 抗体陽性者拾い上げ対策に関する研究」

分担研究者：本田 浩一 大分大学医学部附属病院消化器内科 講師

研究協力者：遠藤 美月 大分大学医学部附属病院肝疾患相談センター 助教

研究協力者：荒川 光江 大分大学医学部消化器内科学講座 助教

研究協力者：藤田 幸子 大分大学医学部附属病院肝疾患相談センター 看護師

研究要旨 院内で測定した HCV 抗体検査の陽性者の中で、治療を要する患者を受療に結びつけられるよう、肝炎医療コーディネーターを活用した拾い上げシステムを構築し、その有効性について検討した。HCV 抗体検査数 8784 人中、HCV 抗体陽性者は 240 名であり、コーディネーターが電子カルテ上の情報を確認し、HCV RNA 検査が必要と判断した 126 名について主治医に連絡し検査を実施。最終的に 22 例の RNA 陽性者が認められた。また、最終把握率は 97.6%であった。県内の肝疾患診療連携協力病院と比較しても最終把握率が高く、院内 HCV 抗体陽性者対策として有効なシステムと考えられた。

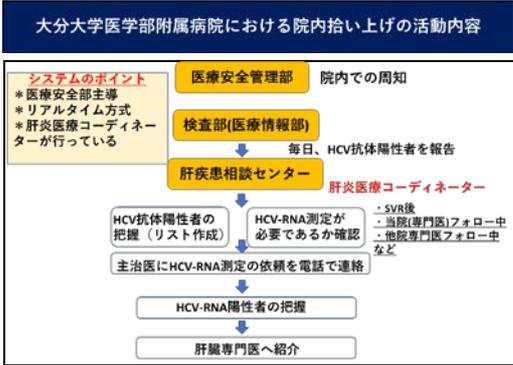
**A. 研究目的**

近年、C型慢性肝疾患患者に対する抗ウイルス療法が進歩し、ほとんどの患者のウイルスを排除することが可能となったが、治療を要する患者が治療を受けていないことがあり、問題となっている。適切な治療を受けてもらうためには、受検、受診、受療の各ステップにおいて、適切な対応を取る必要がある。病院においては、検査で HCV 抗体陽性と判定されても、その後の適切な検査や治療が行われないケースが多いことも指摘されており、有効な対策が望まれている。本研究では院内の抗体検査陽性者の中で治療を要する者を拾い上げ、治療に結び

つけるためのシステムを構築し、その有効性について検討した。

**B. 研究方法**

まず、拠点病院である大分大学医学部附属病院において、肝炎医療コーディネーターを活用した拾い上げシステムを構築し、その有効性について検討した。次に大分県内の肝疾患診療連携協力病院における拾い上げ対策の状況について調査した。大分大学附属病院では医療安全部より、拾い上げシステムについて、全医師に対し周知を行った。システムについては下記に示す。



①検査部の協力を得て、当日測定した HCV 抗体検査陽性者を、肝炎医療コーディネーターと肝臓病専門医師のみが、電子カルテ上で確認できるようにした。

②コーディネーターが毎日、HCV 抗体陽性者を確認し、カルテ上で肝炎に関する情報を確認し、HCV RNA 検査が必要と考えられる患者については、主治医に HCV RNA 検査を提出するよう連絡した。HCV RNA 検査の必要性について判断困難な場合は肝臓専門医に相談した。

③コーディネーターは HCV RNA の検査結果を確認し、陽性者については、肝臓病外来へ紹介するよう、主治医に連絡した。

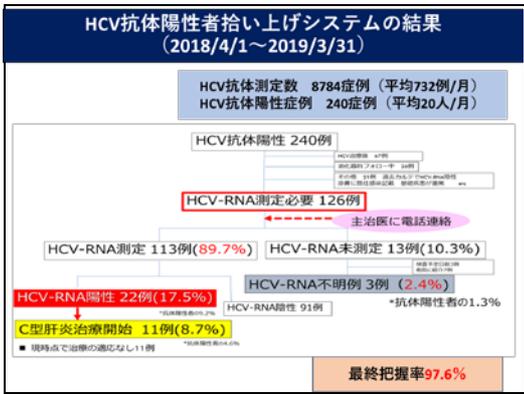
④肝臓専門医が治療の必要性について検討し、治療を要する患者については、自院あるいは他院で抗ウイルス治療を行った。

以上の、システムの有効性について、2018年4月1日から2019年3月31日までのデータを用いて検討した。

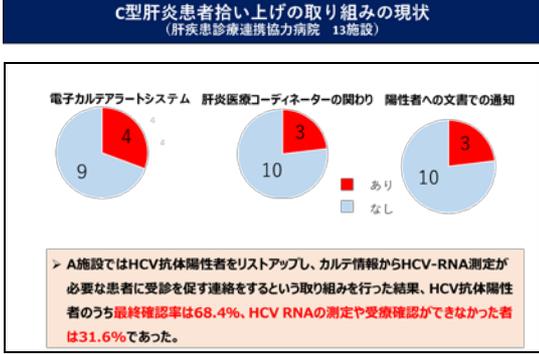
**C. 研究結果**

期間中の HCV 抗体検査数は 8784 人、月平均 732 人であり、そのうち、HCV 抗体陽性者は 240 人であった。HCV 抗体陽性者 240 名中、SVR 後、消化器内科 follow up 中、その他(他院専門医で follow up 中など)を除く

と、HCV RNA 測定が必要な患者は 126 名であった。コーディネーターが主治医に HCV RNA の測定を依頼し、その結果、HCV RNA 陽性者は 22 名、陰性者は 91 名であった。なお、未検査の 13 名のうち 10 名は検査日前あるいは他院に紹介予定の患者であり、最終的に HCV RNA の測定ができなかったのは 3 名であった。



HCV RNA 陽性者 22 名のうち 11 名に対し当院で治療を導入した。残る 11 名は、現時点では適応なしと判断した。以上のことより、肝炎医療コーディネーターによる HCV 抗体陽性者拾い上げシステムによる最終把握率は 97.6%であった。



C 型肝炎患者拾い上げの取り組み状況について、県内 13 肝炎患診療連携協力病院に調査を行い、上記の結果を得た。A 施設では HCV 抗体陽性者をリストアップし、カルテ情

報から HCV-RNA 測定が必要な患者に受診を促す連絡をするという取り組みを行った結果、HCV 抗体陽性者の最終把握率は 68.4%、HCV RNA の測定や受療確認ができなかった者は 31.6%であった。拠点病院と比較すると、最終把握率が低く、拠点病院の方式のほうが有効性は高かった。

#### D. 考察

大分大学医学部附属病院における拾い上げシステムは、最終把握率が非常に高かった。医療安全部が主導することで医師の協力が得られやすく、また、肝炎医療に詳しい肝炎医療コーディネーターが速やかに HCV RNA 検査の必要性について電子カルテ上で確認するため、患者が入院中に HCV RNA の測定を行うことができることが、その理由と考えられた。ただし、本院では肝疾患相談センターに所属するウイルス性肝炎患者の診療に熟練した看護師の肝炎医療コーディネーターがいるため、このシステムが成り立っており、県内の他施設にこのシステムを拡大していくためには、ウイルス性肝炎診療に詳しいスーパーコーディネーターを育成する必要があると考えられた。今後はこのシステムを広めていく上での問題点を明らかとし、活動を継続していく予定としている。

#### E. 結論

肝炎医療コーディネーターを活用した本システムは HCV RNA 陽性者を確実に拾い上げ、受療に至るまでの把握率も高く、ウイルス肝炎受検・受診・受療を進めていく

上で、有効な手段になると考えられた。

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

論文発表 なし

学会発表 第 5 回日本肝臓学会総会、メディカルスタッフセッション、藤田幸子、大分県における肝炎医療コーディネーターの活動状況と課題

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 特になし